

サブゼミで学生生活充実 同期、先輩、後輩が支え

文学部人文社会科学科教育学専攻3年
足立 舜 (東京都立武蔵高校)



教員養成型の大学ではない中央大学では、教育学専攻といえども教員免許取得が卒業の要件ではない。現に私の同期たちで教員免許を取得すべく教職課程を履修しているのはおおよそ半数といったところである。私は中学校・高校の社会科教員になるべく、専攻と教職の授業、そしてアルバイトなどの私生活を両立しつつ、来年度に控える卒業論文執筆に向け見聞を広めている。

教育学専攻では、教育史学、教育社会学、社会教育学、教育行政・制度学、教育哲学、多文化・国際理解教育学とさまざまな分野の先生方が在籍しており、各分野にまたがる「教育学」という学問を多面的、多角的に考察することができるといえる。教員養成に重きを置いていないからこそ「教育学」の根本まで深く考えることができるのが、私たち教育学専攻の利点ではないだろうか。

さて、3年次も後半まで進んだ私の学生生活であるが、ここまで充実した学生生活を送れたのは教育学専攻独自のサブゼミによるところが大きい。サブゼミは、いわゆる「ゼミ」とは違い教授がつかない。もちろん単位も出ない。にもかかわらず、1年生から4年生まで100人以上が、勉強したいことによって12の分科会に分かれて所属している。分科会ごとに内容はさまざま

まで、その中でも私は学校教育分科会に所属し、ゼミ長を務めている。一口に「学校教育」と言っても内容は多岐にわたり、ゼミたちの発表は十人十色のテーマである。週1回のゼミの時間は新しい知識に出会い、考察していく非常に濃いものである。また、毎年2月中旬に行われる「定例会」という行事では、各ゼミが1つの発表を作り上げ、お互いに見せ合う。これが言わば1年間の活動の集大成とも呼べるものとなっている。今年度はゼミ長として臨む定例会となっており、今までの上に定例会に向けて気合が入っている。

もちろん、教育学専攻での生活において、課外活動であるサブゼミだけが特色ではない。3年次には「教育実地研究」という授業がある。これは地方の教育について、実際に現地に赴いて調査・考察を行い、研究として報告書にまとめる、というものである。と書けば一見簡単そうに見えるが、実際には訪問先へのアポイントメントも学生が取るし、研究の内容もまた、学生が主体的に決めていく。授業に関するあらゆる事柄を学生が一人から企画・運営していくのは想像以上に困難で、実際に何度も困難な場面に直面した。今年度は大阪府の教育について調査を行った。私は学校教育班に所属し、大阪府

の
しな!
生活
vol.9
の様子を掲載し、ご父母の
キャンパスライフの風景、また
の情報を発信いたします。



教育学共同研究室で

の学校で生徒の自尊感情の育成について研究・調査した。この文章を書いている時点では報告書の内容確認をしている段階であるが、「草のみどり」が刊行される頃には報告書も仕上がっているであろう。

このように教育学専攻での生活について述べてきたが、一番支えになっているのは専攻の同期、先輩、後輩たちである。個人的には、教育学専攻は学年間の仲が文学部イチ良いのではないかと思う。共同研究室では常にさまざまな学年の学生がおり、和気あいあいとした雰囲気である。特に同期の支えに感謝しつつ、共に卒業まで学び、高め合う生活を送っていききたい。



被災地支援ボランティア活動（面瀬学習支援）の様子



今回はこの場を借りて、私がなぜ心理学を学びたいと思ひ、中央大学に入學し、この3年間何を学び、今後どのような進路へ進みたいと考えているかということについてお話ししたいと思います。

私は小学生の時、なぜ人は1人1人違うのだろうかという疑問に思ひ、「個性」というものに対しての関心を持ちました。そして「個性」がどのように形作られるのかを知りたい、という漠然とした気持ちで、心理学を専攻することになりました。特に、どうして人が人を傷つけるようになってしまふのか、ということを知りたくて、犯罪心理学のゼミがある中央大学を受験することにしました。

1年生の時には、前期後期を通して、4人の先生が交代で授業をしてくれる講義があり、心理学の応用の広さを知

ることができました。皆さんは心理学に対してどのようなイメージを持っていますか？ 心理テストや心を読めるようになるのでは、といった漠然としたイメージしか持っていない人も多いのではないのでしょうか。心理学は、人の目に見えない部分を見えるようにして、人を理解しようとする学問だと私は思ひます。人に関することなら、何でも心理学になるので、その応用はとて幅広く、さまざまな学問とつながり合ひます。その中で、自分自身が何を研究したいのかを見付けなければなりません。また、私はこの1年生の時の授業がきっかけで、大学内の被災地支援ボランティア団体の存在を知り、2年生の春からは、宮城県気仙沼市の子供たちの居場所づくりのための活動に参加することになりました。

文学部生 リアル 学生

文学部生のリアルな学生生活
皆様に文学部生の充実したキ
文学部ならではの取り組み等



軟で、多くのことを感じ、考えているのだということを知りました。そして、子供たちが自分自身を肯定し、その可能性を伸ばしていきけるようになるために、自分には何ができるだろうかと考え始めました。

3年生からは、犯罪心理学のゼミに配属され、犯罪白書を通して、少年院や少年鑑別所の処遇について勉強し、実際に見学に行き、職員の方からお話を伺うことができました。また、児童館や学習障害の子供たちの支援を行っている教室に、定期的に見学に行かせていただいたり、プレパークと少年鑑別所のインターンに行ってみたりと、子供たちのための支援を行っている人たちにお話を伺うことで、自分が将来どのような形で子供たちとかかわっていきたいのかを考えました。

2年生の時には、学部では実験を実際に自分たちでやってみて、レポートにまとめたり、ボランティア活動では、子供たちに楽しんでもらえるような企画を練ったりしていました。この頃に、プレーワーカーという、子供の遊びのプロの人たちと出会ひ、子供の遊びというのは自分か思っている以上に、さまざまな意味を持ち、子供たちは柔

私はずっと「個性」に関心があり、心理学を専攻しましたが、その関心はとて漠然としたものでした。しかし、授業や課外活動を通して、徐々にその漠然とした関心が、子供たちの居場所づくりと成長の手伝いがしたいという、具体的なものへと変わっていききました。今後は、悩みを抱えた子供たちの相談に乗ってあげられるように、大学院へ進み、臨床心理士の資格を取りたいです。

心理学の応用の広さ知る 子供たちの居場所づくり

文学部人文社会学科心理学専攻3年
おおつじ
大辻 みずき (北海道立遠軽高校)



北陸で活動しているプレーワーカーの方々と
(2列目左端が筆者)